

# 正法寺跡発掘調査報告書

— 四條畷市清滝所在 —



2005年3月

四條畷市教育委員会

卷頭図版 1 正法寺跡第一調査区遺物出土状況・周辺調査区全景



# 正法寺跡発掘調査報告書

— 四條畷市清滝所在 —

2005年3月

四條畷市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成16年度国宝重要文化財等保存整備費補助金事業の交付を受けて担当実施した市内遺跡発掘調査等（四條畷市清滝所在の正法寺跡）の報告書である。
2. 正法寺跡は平成16年11月10日に着手し12月27日まで現地調査を行い平成17年3月31日に整理作業を終了した。
3. 調査は、四條畷市教育委員会事務局社会教育課主任野島 稔が担当した。
4. 現地調査の実施にあたっては、土地所有者西尾博樹、小倉基文、中 薫、小倉孝之、各氏及び中山建築設計事務所から数々の配慮を得た。記して感謝する次第である。
5. 発掘調査の進行については、大阪府教育委員会事務局文化財保護課及び櫻井敬夫氏の指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 墓書土器の釈読及び赤外線写真撮影にあたっては、独立行政法人 奈良文化財研究所の渡辺晃宏、山本 崇、馬場 基、各氏のご協力を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 出土遺物の整理・実測などについては、野島稔、村上始、駒田佳子、田伏美智代、また、イラストは佐野喜美があたった。
8. 本書の執筆は野島 稔が行った。

## 本文目次

例　　言	
第1章　　遺跡の位置と歴史的環境	1
第2章　　調査にいたる経過	5
第3章　　調査の成果	8
第4章　　ま　と　め	27
報告書抄録	
図　版	

## 図 版 目 次

- 卷頭図版 1 正法寺跡第1調査区遺物出土状況・周辺調査区全景  
図版 1 正法寺跡調査前全景・機械掘削  
図版 2 正法寺跡第1調査区遺構検出状況  
図版 3 正法寺跡第2調査区遺構・遺物出土状況  
図版 4 正法寺跡第3調査区調査スナップ・土器出土状況  
図版 5 正法寺跡第3調査区遺物出土状況・完掘状況  
図版 6 正法寺跡出土遺物  
図版 7 正法寺跡出土遺物  
図版 8 正法寺跡出土遺物  
図版 9 正法寺跡出土遺物  
図版10 正法寺跡出土遺物

## 挿 入 目 次

- 第1図 正法寺跡周辺地形遺跡分布図 ..... 2  
第2図 正法寺跡調査区位置図 ..... 7  
第3図 正法寺跡調査区遺構配置図 ..... 9  
第4図 正法寺跡第1・第2調査区遺構内遺物出土状況  
　　及び断面実測図 ..... 11~12  
第5図 正法寺跡第1~第3調査区出土遺物 ..... 14  
第6図 正法寺跡第3調査区遺構内遺物出土状況  
　　及び断面実測図 ..... 17~18  
第7図 正法寺跡第3調査区及び周辺調査区出土遺物 ..... 23

## 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。四條畷市正法寺跡は大阪府四條畷市清滝に所在し、飯盛山系の西側斜面から派生する海拔30~35mの清滝丘陵上にある。南北に谷地形をなし、飯盛山系から西に向って、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が流れている。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川・寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地は、原始・古代における幾多の遺跡の存在が知られている。

### 旧石器時代

四條畷市周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川床遺跡では、ハンドアックス・ナイフ形石器・細石器・削器・彫器などが出土している。また、JR忍ヶ丘駅の南側にある南山下遺跡で長さ11cmの完全な有舌尖頭器が出土し、四條畷市忍岡古墳付近・寝屋川市打上でナイフ形石器が採集されている。これらは枚方台地における旧石器研究上きわめて重要な位置をしめている。

### 縄文時代

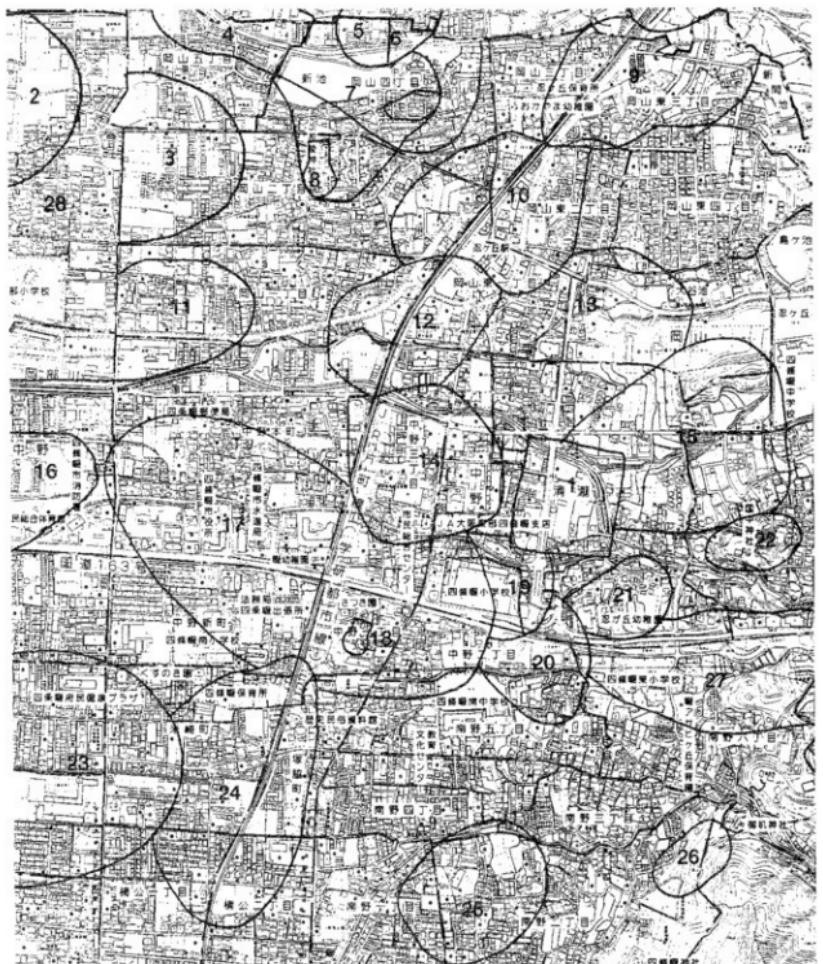
四條畷市田原遺跡や、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡で米粒文・山形文を施した縄文時代早期の押型文土器などが出土している。これらは近畿地方における最古形式の土器である。

縄文時代中期は、四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、寝屋川市讚良川遺跡がある。讚良川遺跡では大量の船元式土器が出土した。

後期・晩期においては、四條畷市更良岡山遺跡で土偶・彫刻石棒・ヒスイ製石斧・土製勾玉などの祭祀具をはじめ高杯形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した。他に四條畷小学校内遺跡や大上遺跡・清滝古墳群で土器類や石鏡が出土している。

### 弥生時代

四條畷市雁屋遺跡で弥生時代前期の大壺（高さ78cm）が出土している。この大壺は北九州の板付Ⅱ式といわれているものである。その壺に伴い石庖丁が2点出土した。そのう



- |             |               |             |
|-------------|---------------|-------------|
| 1. 正法寺跡     | 11. 奈良田遺跡     | 21. 大上遺跡    |
| 2. 砂遺跡      | 12. 南山下遺跡     | 22. 国中神社内遺跡 |
| 3. 北口道跡     | 13. 岡山南遺跡     | 23. 椅屋遺跡    |
| 4. 更良岡山遺跡   | 14. 奈良井遺跡     | 24. 南野米船遺跡  |
| 5. 謹良寺跡     | 15. 清滝古墳群     | 25. 南野遺跡    |
| 6. 謹良川床遺跡   | 16. 錦田遺跡      | 26. 近世墓地    |
| 7. 更良岡山古墳群  | 17. 中野遺跡      | 27. 城遺跡     |
| 8. 忍岡古墳     | 18. 墓ノ堂古墳     | 28. 謹良木条里遺跡 |
| 9. 拝井遺跡     | 19. 四條畷小学校内遺跡 |             |
| 10. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 20. 木間池北方遺跡   |             |

第1図 正法寺跡周辺地形遺跡分布図

もの1点は奈良県耳成山産の流紋岩製である。この石庖丁と大壺の出土は北河内で最初に稻作が開始されたことを示している。なお、この調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出土している。その他、前期の遺跡は四條畷市田原遺跡、寝屋川市高宮八丁遺跡、大東市中垣内遺跡がある。

中期においては、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式に属する雁屋遺跡がある。雁屋遺跡で多数の方形周溝墓が確認され、コウヤマキ・ヒノキ・カヤなどの木棺が出土した。なかでもコウヤマキ製のものは完全な姿で出土した。ヒノキの木棺から完全な人骨も出土した。方形周溝墓の溝から墓前祭祀に使われた朱塗りの壺や把手付鉢などが出土した。木製品では、双頭渦文が彫刻されたヤマグワ製蓋付四脚容器などがある。これはもともと朱彩されていたが、現在は朱の痕跡を確認することはできない。その他、ノグルミ製鳥形木製品は墓で使われた最初の発見であった。また大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査でも集落から鳥形木製品が出土している。

石製品は大量に出土しているが、特筆すべきものは銅鐸の舌が2本出土していることがある。そのうちの1本は徳島の吉野川産の塩基性凝灰岩質点紋片岩である。銅鐸については、「明治44年に、砂岡山から入れ子になった銅鐸2口が出土した」と伝えられる砂山銅鐸があるが、関西大学の所蔵となっている。その他、分銅形土製品が2点出土している。

雁屋遺跡で後期のV様式に属する土器も多量に出土している。そのなかでも丹後・北陸地方の様式をもつ把手付き鉢（住居跡）や脚付き鉢（円形周溝墓）、出雲の様式をもつ低脚杯（包含層）は日本海側との交流を示している。

雁屋遺跡は《中期において拠点的集落であり、後期になるとその位置を保っていなかつた》と考えていたが、大阪府内でもこのように活発な地域交流をした遺跡は見当たらず、雁屋遺跡が衰退したとは全く考えられない。雁屋遺跡は中期から後期まで拠点的集落として存在した重要な遺跡である。よって、後期の土器については整理中である。

## 古墳時代

古墳時代前期においては忍岡古墳がある。全長約87mの前方後円墳である。この古墳の竪穴式石室は保存され見学できる。この古墳築造に関わった集落は確認されていないが今後の調査で発見できる可能性がある。

古墳時代中期になると四條畷市を中心にして馬の飼育が始まった。馬は朝鮮半島から運ばれ、渡来系の人々によって牧場が開かれた。

古墳時代の四條畷市は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2kmほどで河内湖となる。生

駒山系から、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が自然の柵となり牧場に適した環境であった。

鎌田遺跡では楽器のスリザサラや祭具を載せる台が、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している。最近では大阪府教育委員会の調査による藤屋北遺跡では馬骨一体分、準構造船をリサイクルした井戸、大量の製塙土器や鑑が出土し、注目されている。四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡・木間池北方遺跡・城遺跡、などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し、渡来系の人々の存在を示している。

古墳築造については、墓ノ堂古墳をはじめ、馬飼の人々が墓域とした清滝古墳群や大上古墳群など次々と築造された。大上古墳群からは横穴式石室が発見されたが、鎌倉時代に盗掘され遺物のほとんどは失われていたが金銅装中空耳環が片方出土した。その他の古墳で多数の副葬品が出土している。

これらの古墳に伴う形象埴輪は少なく、埴輪のほとんどが集落から出土したものである。古墳からのものでは、忍ヶ丘駅前1号墳で琴を弾く人などがある。集落から出土したものとしては、忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・オスの仔馬形埴輪・水鳥形埴輪、南山下遺跡で馬形埴輪、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している。なお、家形埴輪に伴って日本最古の左足用の木製下駄が出土している。

その他、大東市堂山古墳群・寝屋川市太秦古墳群・終末期の石宝殿古墳などがある。

## 奈良時代

古墳時代に飯盛山系山麓に築かれた古墳群が、奈良時代の正法寺建立の際に整地されたことにより破壊されており、ほとんどの主体部が削平されている。

その他、木間池北方遺跡の河川から円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した。南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土した。

城遺跡では通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が発見された。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器杯Bが出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断できた。その後炭素年代法の分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。近年、考古学と地質学が共同で研究する地震考古学が注目され地震予知の研究がなされている。

なお、奈良時代以降も数多くの遺跡が知られている。

## 第2章 調査にいたる経過

正法寺跡は四條畷市清滝に所在する。小字名で正法寺の地名も残り、古くから古瓦等の発見で寺跡の存在が知られていた。すでに古くから四條畷市清滝在住であった平尾兵吾氏著の『北河内郡史蹟史話』の中に正法寺のことが記されており、寺跡も広く壯麗な大伽藍が整っていたであろうと紹介されている。

また、瀬川芳則氏は、『清滝の古寺正法寺と氏寺の造営』の論文発表をされている。

寺跡は長い間水田地であったが、昭和44年12月に府道新設バイパスによる発掘調査で、石積み基壇、東西にのびる土塀、井戸を検出し各遺構内から奈良時代前期～室町時代にかけての瓦や土器の出土が報告されている。これらの遺構、遺物から正法寺の創建と歴史について明らかにされた。主な伽藍は高台の東西・南北ともに1町四方の中におさまり、南から南大門・中門・東西の塔・金堂・講堂・食堂と並ぶ薬師寺式伽藍配置であろうと推定された。

当寺院は、白鳳時代から室町時代に至るまでの間存続していたことが発掘調査で裏付けられている。正法寺と同一時代の寺院として、南野丘陵の権現川沿いに旧龍尾寺跡、忍岡丘陵の先端に讃良寺、寝屋川市高宮廃寺の四寺が一直線上に等間隔に建立された。『正法寺縁起』に「元弘、建武の兵火に遇うて衆僧悉く退散しぬ。其の後堂閣僧坊悉く鳥有となり、僅かに三重の塔のみ尚存す」とある。

昭和51年と昭和52年の四條畷市教育委員会の調査で正法寺跡の範囲確認調査で中門跡の一部基壇が検出し、創建時の礎石や瓦等が発見された。また、中門跡から西側に続く築地と、南北に通じる築地遺構が今までに三ヶ所検出されている。東側の南北に通じる築地遺構の存在を究明していないが、今後の課題の一つであろう。方位は伽藍中軸線に対し約16°西に振れている。寺域の各幅を計測すると、東西間の幅108m（360尺）、南北間の幅は145m（483尺）となる。伽藍中軸線から測った寺域の東西各限の幅は、西限まで36m（120尺）、東限まで72m（240尺）となっている。すなわち伽藍中軸線から測った寺域は西限まで3／1町、東限まで2／3町と推測できた。

平成5～7年の大阪府教育委員会による府道バイパス予定地内の発掘調査で、基壇建物や掘立柱建物跡、土坑、井戸、溝などの遺構が検出した。また、平安時代中期の基壇の横から「正方寺」と墨書きされた土師器坏が出土している。

平成8年度の府道東側の調査区では平安時代に属する羽口が出土し、寺の所属する鎌・

鍛造が行われた可能性が高く、寺を考える上で貴重な出土となった。

平成9年度の府道両側の調査区では、府道の調査区で確認されている溝の続きを検出した。調査区が伽藍の中心部からはずれていることもあって主だった遺構の検出は無かったが、遺構の広がりのあり方や南端部の地形の状況、基本層序を知ることができた。

平成12年度の府道西側の調査区は、正法寺の伽藍配置の講堂跡に推定される場所で大阪府教育委員会の報告書で東西10m、南北10mの基壇建物の続きを確認したことと、二つの調査結果から基壇建物の規模は東西約26mまで確認できることになった。また、基壇建物の下層から掘立柱建物跡の柱列を確認した。2基の柱跡から創建時代の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が4点出土している点から、正法寺の創建当時の掘立柱建物跡に当たるのではないかと考える。

平成13年の調査では、回廊の南西部にあたると推定されている場所の瓦溜まりから鷦尾片が出土した。この鷦尾は、その形態や創建瓦と共に伴していることから白鳳時代に屋根を飾っていたと考えている。なお鷦尾の出土は、市内において初めての出土である。

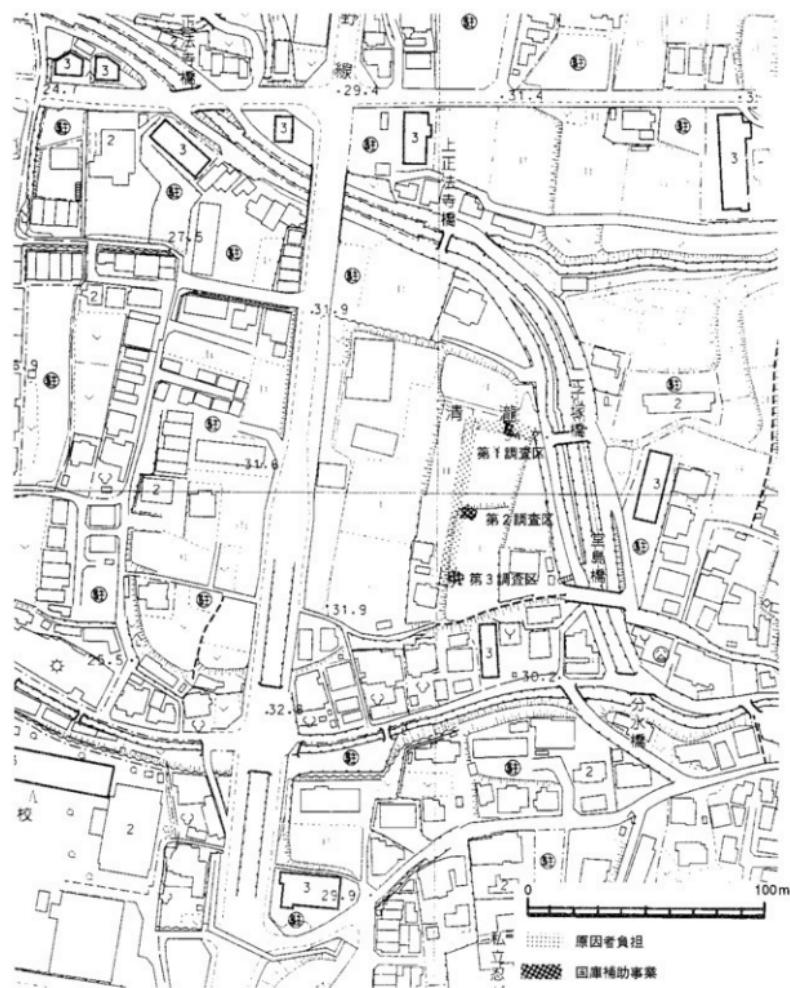
平成14年には、正法寺跡の北東部に位置する（字正法寺）地域の発掘調査を行った。その結果、石列遺構、落ち込み状遺構、河川1、河川2の遺構を検出した。石列遺構内から円筒埴輪・須恵器・土師器・土師質皿・瓦器等の破片が出土した。この石列は、中世の瓦器椀及び土師質皿の土器編年からみると14世紀の石列遺構と考えられる。また、古墳時代の遺物については、正法寺創建時に古墳時代後期の清滝古墳群を削平して建立していることによって、古墳時代の埴輪類が出土する。昭和53~54年の清滝川分水路改修工事に伴う発掘調査では2基の円墳を検出した。この円墳の一基には馬の周溝内埋葬が確認された。また、河川1・2については、縄文時代の遺構である。

平成15年には、寺域の北東部の小字名「双子塚」の南側隣接地にあたる場所を調査した。その結果、古墳時代の須恵器坏身や埴輪とともに瓦片が出土したが、遺構については鋤溝状のもの1条検出ただけであった。

今回の調査区は、小倉孝之、西尾博樹、小倉基文、中 薫各氏連名で、四條畷市大字清滝398-1、399、401-6、400番地の各一部の水田地において道路建設に伴って、文化財保護法第57条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が平成16年8月25日付けで、四條畷市教育委員会に提出された。

この場所の一部は、昭和51年度国庫補助事業の調査において第6トレンチ・第7トレンチ・ボーリングによる発掘調査をした。この調査によって円形落ち込み状遺構や堆積土層

から平瓦片、土師器片、須恵器片が出土した。よって、今回の調査予定地の検討・協議を行った。平成16年11月10日から平成16年12月27日まで平成16年度国庫補助事業と原因者負担による発掘調査を行った。



第2図 正法寺跡調査区位置図

### 第3章 調査の成果

四條畷市大字清滝401-6、399、398-1、400番地は、南北に長く4枚の水田及び畠地が袋状である。このような地形から農機具等の搬入及び農作業が不便であった。よって、土地の境界線を利用して東西方向から南北方向へとL字状に104mの新設道路を設置するものである。

この場所は、正法寺跡の東側端に位置する。調査にいたる経過で説明した昭和51年度の国庫補助事業に伴う発掘調査によって大字清滝398-1番地から円形の落ち込み遺構をトレチで確認した土地である。

発掘調査地の北端に計画されている東西方向の道路予定地の中間位置に幅4.7m×5mの23.5m<sup>2</sup>を第1調査区とし、南北方向の道路予定地の大字清滝399番地と400番地境に進入口計画部分の幅4.7m×5mの23.5m<sup>2</sup>を第2調査区、大字清滝400番地内の進入口計画部分幅4.7m×5mの23.5m<sup>2</sup>を第3調査区として合計70.5m<sup>2</sup>を平成16年度国庫補助事業として実施。それ以外の道路予定地の514.5m<sup>2</sup>の発掘調査については原因者負担で調査を行なった。

#### 第1調査区（第3図～第4図・図版2）

清滝399番地の北端に計画された東西方向の道路予定地に中間位置に道路幅4.7m×東西5mに第1調査区を設定した。

第1調査区南壁の基本層序は次のとおりである。

第1層 耕土 厚さは、約30cmである。

第2層 床土（褐灰色砂質土（10YR6/1） 厚さは、約20cmである。床土下で海拔TP+34.90mを測る。

第3層 にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3） 南側断面の一部に堆積、厚さ約8cmである。

第4層 灰白色砂層（10YR8/1） 南側断面の一部に堆積、厚さ約10～20cmである。

第5層 褐灰色砂質土（10YR4/1） 石敷き遺構を検出。人頭大及び拳大の花崗岩の石敷き内から瓦片が出土。厚さ約20cmで地山となる。この石敷き遺構の南側に溝状遺構を検出した。第6層以下はこの溝状遺構の堆積土層である。

第6層 灰白色砂層（2.5Y8/1） 厚さ約10～30cm堆積している。

第7層 灰白色砂層（10YR8/2） 厚さ約12cmのブロック状に堆積している。



第3図 正法寺跡調査区遺構位置図

- 第8層 褐灰色シルト (10YR6/1) 第11層堆積後に置かれた巨石までの長さ1.3mに厚さ約20cmの堆積土である。
- 第9層 灰白色砂質土 (2.5Y8/2) 肩部の一部に堆積が認められる。厚さ約10~20cmである。
- 第10層 灰白色シルト (10YR7/1) 肩部に堆積が認められる。厚さ約8cmである。
- 第11層 にぶい黄橙色砂質土 (10YR6/3) 厚さ約10~18cmである。ほぼ全体の最下層である。第11層堆積後に約55cm以上の花崗岩が置かれている。
- 第12層 灰白色砂層 (10YR8/1) 厚さ約4cmである。一部の最下層である。

#### 遺構 (第4図~5図・図版2)

第1調査区は、X = -139.970、Y = -31.973地点を中心にして東西2.6m、南北3.3mの範囲から石敷き遺構と南側に溝状遺構をそれぞれ検出した。

第5層 (褐灰色砂質土 (10YR4/1)) の石敷き遺構は、海拔T.P + 34.88mを測る。遺構内から長辺52cm・短辺15cmや長辺40cm・短辺38cmの人頭大の花崗岩9個と6cm~15cmの拳大の花崗岩約260個が出土。人頭大の石は一ヶ所に集中している。拳大の花崗岩は人頭大の花崗岩の西側一帯と南側の

一部に敷かれた状況で検出した。この石敷き遺構の西側は約20cmの比高差がある。拳大の石敷き内から均整唐草文軒平瓦（第5図-1）1点、平瓦片30点、須恵器高坏脚部片1点、土師器片1点などが出土。

この石敷き遺構の南側に溝状遺構を検出した。第6層以下はこの溝状遺構の堆積土層である。

第5図-1 均整唐草文軒平瓦 外区に三重の圈線を巡らし、外縁は幅が狭く、高さも低い。頸は曲線頸を呈する。平瓦と瓦当部は凸面と凹面に粘土を補填して接合し、凹面にヨコナデ調整、凸面にタテナデ調整を施している。

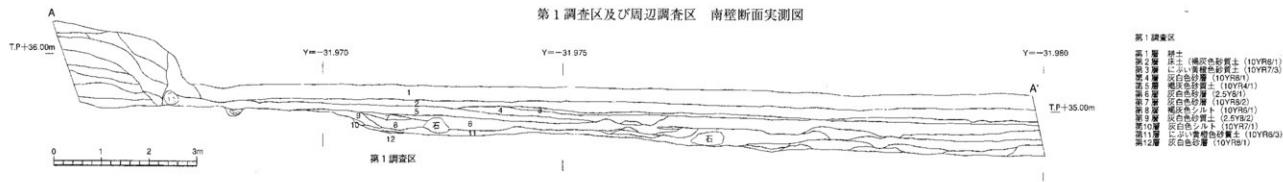
## 第2調査区（第3図～5図・図版1・図版3・図版7～8）

清滝399番地と400番地の境界部分に、計画された南北方向の道路予定の中間位置に水田出入口の道路幅4.7m×東西5mに第2調査区を設定した。

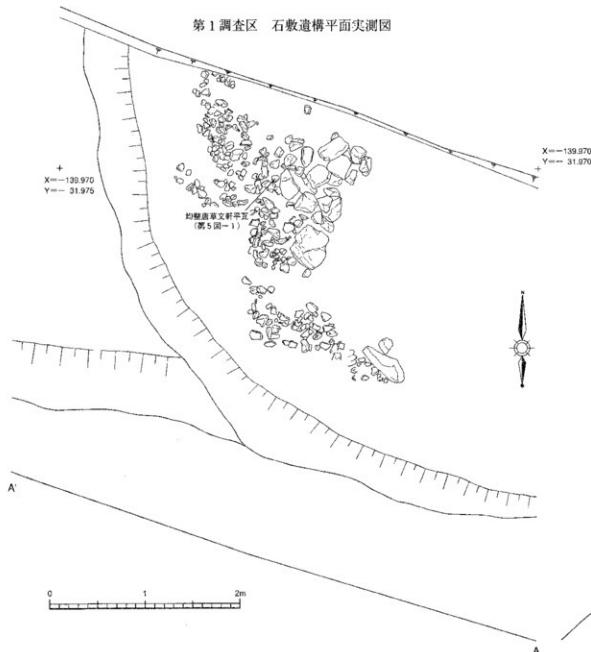
第2調査区南壁の基本層序は次のとおりである。

- 第1層 耕土 厚さは、約30cmである。
- 第2層 床土A（浅黄色砂質土2.5Y7/3） 厚さは、約7～20cmである。床土下で海拔TP+35.50mを測る。
- 第3層 床土B（褐灰色砂質土（10YR6/1） 西側の一部に堆積、厚さ約8cmである。
- 第4層 浅黄色砂質土（2.5Y7/4） 厚さ約5cmである。
- 第5層 浅黄色シルト（2.5Y8/3） 厚さ約10cmである。
- 第6層 褐灰色砂質土（10YR4/1） 第6層と第8層は溝の堆積後で窪みに堆積した土層で厚さ約6～22cmである。
- 第7層 褐灰色砂質土（10YR5/1） 厚さ約10～15cmである。第7層下で溝の左岸肩部を検出した。第10層以下はこの溝の堆積土層である。
- 第8層 灰白色砂質土（10YR7/1） 第6層同様に窪みに堆積が認められる。厚さ約10～22cmである。第8層下で溝の右岸肩部を検出した。
- 第9層 褐灰白砂層シルト混じり（10YR5/1） ブロック状に厚さ約15cmである。
- 第10層 浅黄色砂層（2.5Y7/1） 左岸側の堆積で厚さ約5cmである。
- 第11層 褐灰色砂質土（10YR5/1） 厚さ約8～10cmである。
- 第12層 褐灰色砂層シルト混じり（10YR5/1） 右岸側の堆積で厚さ約8cmである。
- 第13層 灰色砂層（5Y5/1） 左岸側の堆積で厚さ約12cmである。

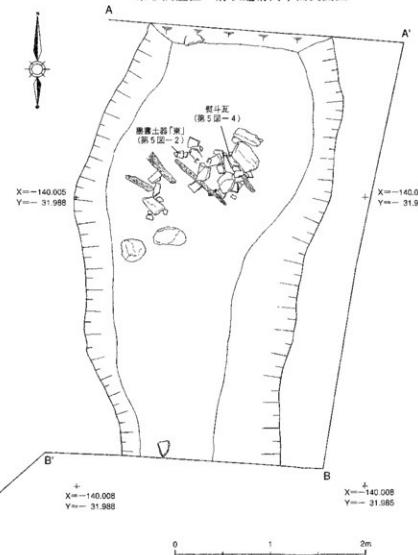
### 第1調査区及び周辺調査区 南壁断面実測図



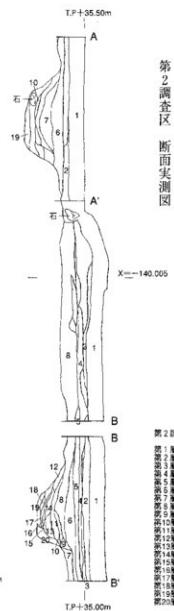
### 第1調査区 石敷遺構平面実測図



## 第2調査区 溝状遺構内平面実測図



第2調査区



2 開發

土圭	土圭 A (浅黄色砂質土, 2.5Y7/3)
宋	宋 B (細灰色砂質土, (10YR6/1))
青黃色砂質土	(2.5Y7/4)
黃褐色砂質土	(2.5Y8/3)
褐色砂質土	(10YR4/1)
深褐色砂質土	(10YRS1/1)
暗褐色砂質土	(10YR5/1)
灰褐色砂質土	(2.5Y7/1)
深灰褐色砂質土	(10YR5/1)
暗灰褐色砂質土	(10YR5/1)
灰色砂質土	(5Y5/1)
淺灰色砂質土	(N3/1)
色砂質土	(5Y5/1)
白褐色砂質土	(5Y7/1)
灰白色砂質土	(5Y8/2)
深灰白色砂質土	(5Y8/2)
黑色砂質土	(5Y8/2)
深黑色砂質土	(10YRS1/1)

第4図 正法寺跡第1・第2調査区遺構内遺物出土状況 及び断面実測図

- 第14層 暗灰色砂質土（N3/）右岸側の堆積で厚さ約10cmである。
- 第15層 灰色砂質土（5Y5/1）厚さ約5cmである。
- 第16層 灰白色シルト（5Y7/1）厚さ約4cmである。
- 第17層 灰白色シルト（5Y8/2）厚さ約5cmである。
- 第18層 灰白色砂粒層（5Y8/2）厚さ約5cmである。
- 第19層 灰白色砂層（5Y8/2）ほぼ全体の最下層で厚さ約6cmである。
- 第20層 褐灰色シルト（10YR5/1）左岸側の最初の堆積で高さ約50cm、溝肩いっぱいに厚さ約10cm堆積した。

#### 遺構（第3図～4図・図版3）

第2調査区は、X = -140.005、Y = -31.987地点を中心に南北方向に掘られた溝を1条検出した。調査区内で延長4.5mまで確認した。検出肩部は南壁断面でTP+35.10m、幅1.7m、深さ60cmで溝底TP+34.50mで断面は皿状を呈する。北壁断面の肩部はTP+35.00m、幅1.9m、深さ75cmで溝底TP+34.35mを測る。溝底の比高差からみて、南から北に向かって流れた溝である。

この溝の主軸はほぼ南北を呈しているが、溝の延長は今回の道路予定地の発掘調査内及び全ての断面から見ても、溝の続きを確認することができなかった。

今回調査した溝内の北寄りにあたるX = -140.005、Y = -31.897地点で長辺33cm・短辺20cmの人頭大花崗岩7個と長辺15cm・短辺8cmの拳大花崗岩6個と熨斗瓦（第5図-4・図版8-4）、平瓦、砥石（第5図-3）と土師器坏A（第5図-2・図版7-2）がTP+34.446mから出土した。この土師器皿底部外面には「東」と墨書きされている。

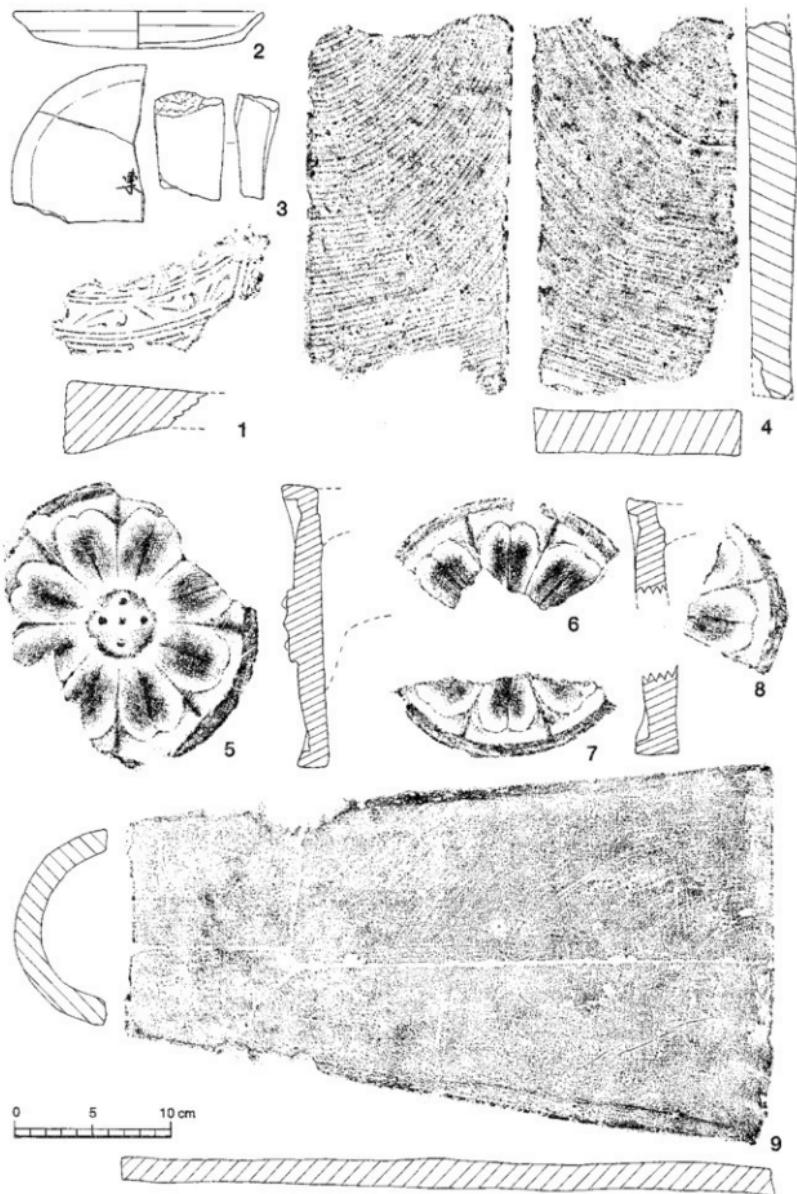
#### 出土遺物（第5図・図版3・図版7～8）

溝内から出土した遺物としては、土師器坏Aと熨斗瓦、砥石が出土した。

第5図-2 土師器坏A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口径15.8cm、器高2.4cm、胎土緻密である。色調はにぶい橙色を呈している。底部外面に「東」の墨書きがある。

第5図-3 仕上砥石 平面形が方形状で断面は長方形を呈している。最大長6.9cm、最大幅4.4cm、厚さ2.5cmを図る。4面に使用痕が残存する。

第5図-4 熨斗瓦 焼成前に平瓦を半裁した切熨斗瓦で、幅13cm、長さ24.3cm、厚



第5図 正法寺跡第1～第3調査区出土遺物

み2.5cmを測る。3側面はまっすぐに切ってある。焼成はやや軟質である。凹凸面調整では粗いかき目調整を行っている。胎土は砂粒を混ぜ、砂粒の大きさは3mm大である。凸面には幅6mm、長さ20cmの横方向の丹線（ベンガラ）が観察できる。これは瓦を受ける瓦座に瓦を載せた際に建物を彩色するハケの丹（ベンガラ）が軒平瓦に及ぶことが一般的であるが、今回の駁斗瓦に丹線が観察できることから補修期に瓦の差替えが行われたか、建物全体の塗り直しを含めた大きな改修が行われてと見ることができる。

### 第3調査区（第3図・第5図～7図・図版1・図版4～7・図版9～10）

清流400番地に、計画された南北方向の道路予定の南端近くに水田出入口の道路幅4.7m×東西5mに第3調査区を設定した。

第3調査区東壁と南壁の基本層序は次のとおりである。

第1層 耕土 厚さは、約30cmである。

第2層 床土A（褐灰色砂質土10YR6/1）厚さは、約15cmである。床土下で海拔TP+35.50mを測る。

第3層 床土B（にぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）厚さ約6cmである。

第4層 褐灰色砂質土（10YR5/1）厚さ約18～30cmである。

第5層 灰白色砂質土（10YR7/1）厚さ約18～40cmである。第5層下で大溝の左岸肩部を検出した。第6層以下はこの大溝の堆積土層である。

第6層 灰白色シルト（2.5Y8/2）大溝の堆積後で窪みに堆積した土層で厚さ約10cmのブロック状に堆積している。

第7層 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）大溝の左岸肩部で最終に堆積した土層である。厚さ約25cmのブロック状に堆積している。

第8層 灰白色シルト（2.5Y7/1）第6層と第8層は大溝の堆積後で窪みに堆積した土層で厚さ約13～25cmである。

第9層 灰白色砂層（2.5Y8/1）第8層同様に窪みに堆積が認められるが、厚さ約5～15cmである。多くの花崗岩が流されてきている。

第10層 にぶい黄色砂質土（2.5Y6/3）ブロック状に厚さ約15cmである。瓦片が出土。

第11層 灰白色砂層（2.5Y7/1）厚さ約8～15cmのブロック状に堆積している。

第12層 灰黄色シルト（2.5Y7/2）厚さ約10cmのブロック状に堆積している。

第13層 明オリーブ灰色砂質土（5GY7/1）厚さ約10cmのブロック状に堆積している。

- 第14層 黄灰色砂質土（2.5Y6/1）厚さ約6cmのブロック状に堆積している。
- 第15層 灰白色シルト（2.5Y8/2）右岸側裾に厚さ約8cm堆積している。
- 第16層 灰白色シルトやや砂混じり（2.5Y7/1）右岸側の堆積で厚さ約15cmである。  
40cm内外の巨石と一緒に多くの須恵器、土師器、創建当時の軒丸瓦、平瓦、丸瓦等が出土。
- 第17層 灰白色シルト（2.5Y8/2）厚さ約10cmである。大溝の右岸肩部に堆積している。
- 第18層 灰白色シルト（2.5Y8/2）厚さ約10cm幅約30cmのブロック状に堆積している。
- 第19層 灰白色砂層小石混じり（2.5Y8/1）厚さ約20cmである。大溝の中央部に堆積している。
- 第20層 灰黄色砂層（2.5Y7/2）厚さ約8cmである。大溝の中央部に堆積している。
- 第21層 灰白色シルト（2.5Y8/1）厚さ約5cmのブロック状に堆積している。
- 第22層 灰黄色砂層（2.5Y7/2）厚さ約5cmである。
- 第23層 灰白色砂層（2.5Y8/2）厚さ約5cmである。
- 第24層 灰白色シルト（2.5Y7/1）厚さ約5～8cmである。
- 第25層 灰白色砂層（2.5Y8/1）厚さ約5cmである。
- 第26層 黄灰色砂層（2.5Y6/1）厚さ約5cmである。最下層の堆積土層である。

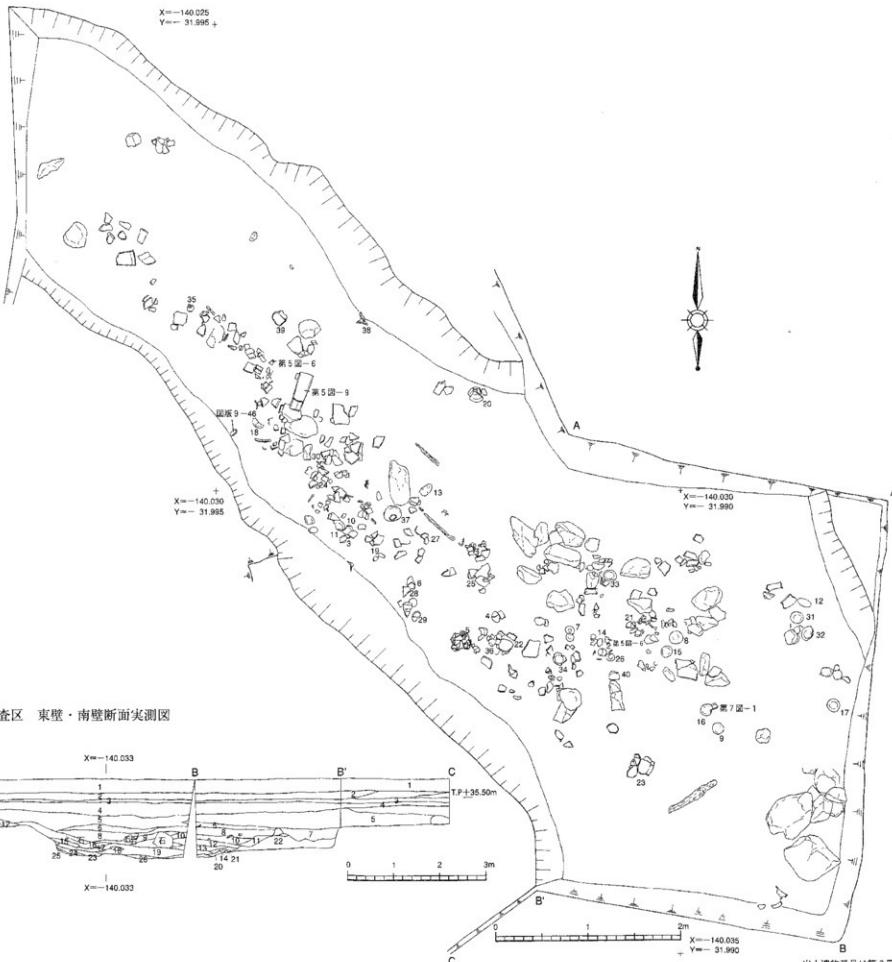
#### 遺構（第3図・第6図・図版4～5）

第3調査区は、X = -140.034、Y = -31.990地点から北流してX = -140.032、Y = -31.990から西に45度中心に西北方向に掘られた大溝を1条検出した。清滝400番地の国庫補助事業で検出した部分と清滝398-1番地の原因者負担で検出した部分は同一の大溝であり、関連することから大溝全体をここで報告しておきたい。

大溝は調査区内で延長13mまで確認した。大溝左岸の検出肩部は清滝400番地の南壁断面でTP+34.90m、右岸の検出肩部は東壁断面でTP+34.95m、幅4.8m、深さ70cmで溝底TP+34.20mで断面は皿状を呈する。清滝398-1番地の西壁断面の肩部はTP+34.51m、幅3m、深さ40cmで溝底TP+34.10mを測る。溝底の比高差からみて、東から西に向かって流れた大溝である。

大溝内では第7図-1～38の奈良時代中頃、平城京Ⅲ～Vの時期に比定される土師器椀A、坏A、坏C、坏B、皿A、甕B、須恵器椀A、坏A、坏B、平瓶B、台付長颈壺、砥石などと第7図-37の須恵器大型甕、第7図-39の朝顔形埴輪が出土している。

出土状況は大溝中心部に集中して花崗岩の石とともに土師器、須恵器、瓦等が混在して



第3調査区 東壁・南壁断面実測図

第6図 正法寺跡第3調査区構造内遺物出土状況及び断面実測図

第3調査区

1	灰土
2	A. 梅田色砂質土(10YR8/1)
3	B. 灰白色砂質土(10YR7/1)
4	C. 灰白色砂質土(10YR7/1)
5	D. 灰白色シルト(2.5Y9/2)
6	E. 灰白色シルト(2.5Y9/2)
7	F. 灰白色シルト(2.5Y7/1)
8	G. 灰白色シルト(2.5Y7/1)
9	H. 灰白色砂質土(2.5Y7/1)
10	I. 灰白色砂質土(2.5Y7/1)
11	J. 灰白色砂質土(2.5Y7/1)
12	K. 灰白色砂質土(2.5Y7/1)
13	L. 灰褐色砂質土(5Y7/1)
14	M. 灰褐色シルト(2.5Y6/2)
15	N. 灰褐色シルト(2.5Y6/2)
16	O. 灰褐色シルトやや粘重じり(2.5Y7/1)
17	P. 灰褐色シルト(2.5Y7/2)
18	Q. 灰褐色シルト(2.5Y7/2)
19	R. 灰褐色シルト(2.5Y7/2)
20	S. 灰褐色シルト(2.5Y7/2)
21	T. 灰褐色シルト(2.5Y7/2)
22	U. 灰褐色砂質土(2.5Y7/2)
23	V. 灰褐色砂質土(2.5Y7/2)
24	W. 灰褐色砂質土(2.5Y7/1)
25	X. 灰褐色砂質土(2.5Y7/1)

出土遺物番号は第7回実測図番号と対比

出土しているが、実測図に示したとおり完形品も多く含まれ、ローリングを受けた痕跡がなく大溝上流から流されてきたとは考えられない。

この大溝の主軸はほぼ東西を呈しているが、大溝の延長は清瀧398-1番地内には続くことは確実であるが、その西側に清瀧398-2番地の小倉基文氏の住宅に向かっていくと思われるが、住宅の西側の水田とは約2.2mの落差があり、この土地で大溝が終了するものと思われる。一方上流側の清瀧400番地の土地では方向的には市道にあたり、その南側は崖になることから、最大延長75m以内であると考えられる。

#### 出土遺物（第5図・第7図・図版4～10）

今回の寺跡の調査で出土した遺物は、そのほとんどは第3調査区の大溝から出土した。大半は土師器、須恵器などの土器類であるが、他には軒丸瓦、平瓦・丸瓦、楕形滓（図版9-46）、鉄滓、馬の歯などである。

調査区で得られた遺物は、コンテナの数にして約50箱分であった。奈良時代の土器類が一括して多く出土した。その主な遺物について略述する。以下、出土した瓦も含めて述べる。

#### 土器類

土器類は古墳時代と奈良時代のものであった。瓦と同様に大溝からの出土である。古墳時代のものは須恵器壺と朝顔形埴輪が含まれ、5世紀後半の清瀧古墳群に係るものと考えられる。奈良時代の土器類は下記のとおりである。

##### （1）土師器（第7図-1～23、図版6・図版9）

第7図-1 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。口径8.8cm、器高3.7cm、胎土は密であるが、口縁外部に3mmの石が含まれている。色調はにぶい褐色を呈している。出土した梶Aの中で最も小型である。

第7図-2 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部は丸くおわる。口径10.2cm、器高3.5cm、胎土は密であるが、口縁内部に4mmの石が含まれている。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-3 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。口径10cm、器高3.7cm、胎土は密であるが、口縁内部に2mmの石が多く含まれている。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-4 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。口径11.5cm、器高3.9cm、胎土は密であるが砂粒が多く含む。底部内部に3mmの石が多く含まれている。口縁外面に巻き上げ痕が認められる。色調はにぶい黄

橙色を呈している。

第7図-5 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。口径11.3cm、器高4.4cm、胎土は密である。口縁外面に巻き上げ痕が認められる。色調は灰白色を呈している。

第7図-6 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。口径11cm、器高3.6cm、胎土は密であるが、口縁内部に2mmの石が含まれている。口縁外面に巻き上げ痕が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈している。

第7図-7 梶A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。口径11.9cm、器高3.9cm、胎土は密であるが、口縁内部に3mmの石が含まれている。色調は灰白色を呈している。出土した梶Aの中で最も大型である。

第7図-8 坏A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口径13cm、器高3.9cm、胎土緻密である。色調は浅黄橙色を呈している。底部外面に×のヘラ記号がある。出土した坏Aの中で最も小型である。

第7図-9 坏A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口径13.6cm、器高4.3cm、胎土緻密である。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-10 坏A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口径13.6cm、器高4.2cm、胎土緻密である。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-11 坏A 上げ底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。体部外面に巻き上げ痕が認められる。口径13.9cm、器高4.1cm、胎土緻密である。色調は明褐灰色を呈している。

第7図-12 坏A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁外面に巻き上げ痕が認められる。口径14.4cm、器高4.1cm、胎土は密であるが砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-13 坏A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口径14cm、器高4.6cm、胎土は砂粒が多く表面剥離のため調整の観察困難である。色調は橙色を呈している。

第7図-14 坏A 丸底気味の底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおわる。器高が高く器形は梶Aタイプに似る。口径12.8cm、器高4.8cm、胎土は

密である。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-15 坯A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口径13.2cm、器高4.3cm、胎土緻密である。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-16 坯A 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁部内面に密な一段の放射暗文を施す。口縁部外面に指おさえ痕後ヨコナデを施している。口径13.9cm、器高3.9cm、胎土は緻密である。色調は橙色を呈している。

第7図-17 坯C 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部内面に一段の放射暗文を施し、底部内面にラセン暗文を施す。底部外面はヘラ削り、口縁部外面はヨコナデを施している。口径12.7cm、器高5.5cm、胎土は緻密である。色調は橙色を呈している。

第7図-18 坯C 丸底気味の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁部内面に一段の放射暗文を施した痕跡がある。底部外面はヘラ削り、口縁部外面はヨコナデを施している。口径16.4cm、器高5.7cm、胎土は緻密である。色調は浅黄橙色を呈している。

第7図-19 皿A 広く平らな底部に斜め上方に広がる口縁部をもつものである。口径20cm、器高3.6cm、胎土は砂粒が多く表面剥離のため調整の観察困難である。色調は橙色を呈している。

第7図-20 皿A 広く平らな底部に斜め上方に広がる口縁部をもつものである。口径20.2cm、器高3.5cm、胎土は緻密である。色調は明褐灰色を呈している。内外面に煤が付着している。

第7図-21 皿A 広く平らな底部に斜め上方に広がる口縁部をもつものである。口縁端部内面に一段の放射暗文を施す。底部外面ナデ、口縁部外面ヨコナデを施す。口径22.8cm、器高3cm、胎土は緻密である。色調は橙色を呈している。

第7図-22 坯B 高台がついている。口縁部上半がわずかに外反し、口縁端部は内側に巻き込み気味である。口縁部内面に密な一段の放射暗文を施す。口縁部外面ヨコナデを施している。口径20.6cm、器高6.2cm、胎土は緻密である。色調は橙色を呈している。

第7図-23 壺B 体部が球形をなす。口縁部は内湾しながら外上方に立ち上がり、端部は平坦にちかい。体部上位に把手をつける。口径25.5cm、器高17.8cm、胎土は密である。色調は浅黄橙色を呈している。体部外面は上半部が縱方向のハケ調整を行い、下半

部は横方向のハケ調整が施されている。

(2) 須恵器 (第7図-24~38、図版9~10)

第7図-24 梶A 底部は比較的深く平らである。口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部外面は回転ヘラ切りである。口径8.4cm、器高3.7cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成硬質である。

第7図-25 坯A 底部はやや平底をもち、口縁部は内彎気味にのび端部は丸い。口径10.4cm、器高2.9cm、胎土は緻密である。口縁部内面に自然釉痕が認められる。色調は青灰色を呈している。焼成はやや硬質である。

第7図-26 坯A 底部はやや深く丸みをもち、口縁部は内彎気味にのび端部は丸い。口径10.5cm、器高3.9cm、胎土は緻密である。口縁部に重ね焼痕が認められる。色調は青灰色を呈している。

第7図-27 蓋坏(蓋) 天井部は平らで、口縁部は天井部より屈曲して下内方にまっすぐのびる。つまみは擬宝珠様。口径10.8cm、器高1.4cm、つまみ径2cm。色調は灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-28 坯A 底部はやや深く丸みをもち、口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部外面は回転ヘラ切りである。口径12cm、器高3.9cm、胎土は密である。色調は灰色を呈している。焼成はやや軟質である。

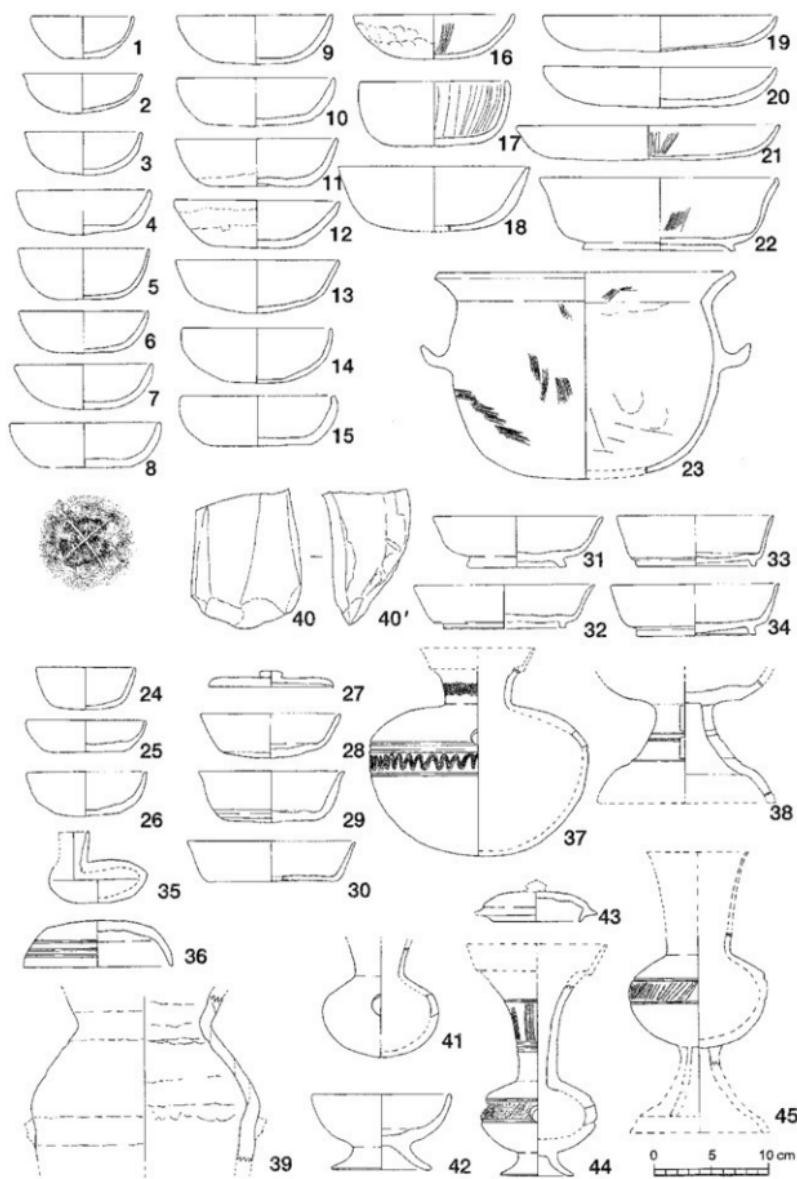
第7図-29 坯A 底部は比較的深く丸みをわずかにもつ。口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部外面は回転ヘラ切りである。口径12.6cm、器高4.5cm、胎土は密である。色調は青灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-30 坯A 底部は比較的深く平らである。口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部外面は回転ヘラ切りである。口径14.6cm、器高3.5cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成はやや硬質である。

第7図-31 坯B 底部は比較的深く平らである。口縁部は上外方にのび端部は丸い。低部からかなり外反する高台を貼付する。底部外面は回転ヘラ切りである。口径14.8cm、器高4.4cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-32 坯B 底部は比較的浅く平らである。口縁部は上外方にのび端部は丸い。低部からかなり外反する高台を貼付する。杯Aよりやや大型である。口径15.6cm、器高3.8cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-33 坯B 底部は比較的深く平らである。口縁部は上外方にのび端部は丸い。低



第7図 正法寺跡第3調査区及び周辺調査区出土遺物

部からかなり内側に外反する高台を貼付する。底部外面は回転ヘラ切りである。口径13.6cm、器高4.5cm、胎土は緻密である。色調は青灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-34 壺B 底部は比較的深く平らである。口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部からかなり内側に外反する高台を貼付する。口径14.7cm、器高4.5cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-35 平瓶B かなり小型の製品である。口頸部は基部細く大きく外反する。頸部に文様は伴わない。体部全体に丸みを認める。体部下位から底部に回転ヘラ削り調整を行なう。口径5cm、器高6.4cm、胴径8.5cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成は硬質である。口縁部内面及び上部に自然釉痕が認められる。

第7図-36 蓋壺 天井部は丸く、口縁部は内弯して下外方にのびる。口縁端部は内傾する凹面をなす。マキアゲ・ミズビキ形成。外面2/3回転ヘラケズリ調整。口径13cm、器高4cm、胎土はやや密である。色調は灰白色を呈している。焼成はやや硬質である。

第7図-37 大型甌 口頸基部は比較的太く、外反した傾斜角度を変えて上外方にのびる。口縁部は欠損している。体部は最大径を上位に求める球形をなし底部は丸い。体部上部に円孔を穿つ。口縁部に波状文、体部外面には沈線および波状文などの文様が施されている。推定口径10cm、推定器高18cm、基部径5.7cm、体部最大径19cm、胎土は緻密である。色調は灰白色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-38 台付長頸壺 体部から頸部は欠損している。底部は丸い。脚部は基部より外反して下外方にのび、裾部で外方に段をなして内弯気味に下外方にのびる。脚部に長方形の2段透かしを3方向に有する。脚基部径5cm、胎土は緻密である。色調は灰白色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-39 朝顔形埴輪 肩部の一部が残存している。外反する口縁部と丸味のある肩部を有する。頸部と体部の突帯のはがれた痕跡が認められる。頸部の直径11.5cm、突帯幅2.2cmである。肩部に横方向のハケ目が認められる。

第7図-40 荒砥石 平面形が長方形で断面は円形を呈している。最大長11.4cm、最大幅9.5cm、厚さ7.2cmを図る。3面に使用痕の浅い窪みが残存する。

#### 瓦 類 (第5図-5~9・図版7-5~10・図版8-9)

今回の調査でも瓦が主な出土遺物となっているが、そのほとんどが平瓦であった。軒丸瓦と丸瓦が少量含まれ、軒平瓦は皆無であった。瓦制作時に使われた叩き具は、斜格子・

正格子・繩・三角格子目などの種類が用いられている。

(1) 軒丸瓦 (第5図5~8、図版7-5~6・8・10)

出土した軒丸瓦はすべて素弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、創建時のものである。

第5図-5 素弁八葉蓮華文軒丸瓦 連弁の中央に稜線をもち、間弁は中房から外縁に向かって扇状に広がっている。中房は凸状で断面台形を呈し、蓮子を1+4で配している。瓦当部裏面の丸瓦の接合部分には刻み目状の痕跡が見られる。瓦当部裏面は縦方向のナデ調整を行ったあと周縁をナデ調整している。やや軟質で、灰色を呈している。

第5図-6 素弁八葉蓮華文軒丸瓦 瓦当部約1/4が残存し、瓦当部の上部に当たる。

瓦当部裏面の丸瓦の接合部分には刻み目状の痕跡が見られる。接合部凹凸両面に補足粘土が加えられている。焼成は硬質で濃灰色を呈している。

大溝内で4.7m離れて出土した素弁八葉蓮華文軒丸瓦が接合した。

第5図-7 素弁八葉蓮華文軒丸瓦 瓦下部である。焼成は硬質で濃灰色を呈している。

第5図-8 素弁八葉蓮華文軒丸瓦 瓦右部である。瓦当部裏面の丸瓦の接合部分には刻み目状の痕跡が見られる。焼成は硬質で灰色を呈している。

(2) 丸瓦 (第5図-9、図版8-9)

第5図-9 丸瓦 行基式の丸瓦で完形品である。大型で胎土は精良で砂粒は稀である。

全体を丁寧にナデで、形も整っている。凸面の一部に布目が残る。凹面全体に布目が残る。狭端16cm、広端26.5cm、全長41.5cm。

### 周辺調査区の遺構

X = -139,965、Y = -31,984地点で2m以上の巨石が検出した。この巨石周辺から、平瓦と伴に須恵器無蓋高壺（第7図-42）と蓋（第7図-43）が出土した。

また、X = -139,970、Y = -31,988地点で巨石群を重機で除去すると東西75cm、南北60cm、深さ16cmの土坑が見つかり、土坑内には須恵器壺（第7図-41）と平瓦、土師器甕の破片が埋められていた。

X = -139,975、Y = -31,985地点で南北7.7m、0.8mの隅丸方形の落ち込み状遺構を検出した。遺構の裾部には、花崗岩の人頭大の石が散乱し、最下層には巨木の根部が出土した。東側断面の最下層である褐灰色粘質土（腐植土混じり）10YR4/1から須恵器台付壺（第7図-44）と台付長頸壺（第7図-45）が並べられた状況で検出された。

第7図-41 壺 口頸部は基部より外反して上外方にのびる。口縁部は欠損している。体

部は最大径を中位に求める球形をなし底部は丸い。体部中央に円孔を穿つ。文様は施されていない。残存器高9.6cm、基部径4.2cm、体部最大径10.2cm、胎土は緻密である。色調は灰白色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-42 無蓋高坏 いわゆる蓋坏の蓋を逆転させた形態の坏部を有する小型の無蓋高坏で、口縁部は内弯して上外方にのびる。口縁端部は丸い。底部は窪んでいる。基部から大きく外反する脚部を有する。脚部に透かしがない。口径12cm、器高6.5cm、脚基部径5cm、脚底径8.6cm、脚部高2cm、胎土は緻密である。色調は灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-43 台付長頸壺の蓋 天井部は丸味をもつ、口縁部は下外方にまっすぐのび、端部は丸い。かえりは外反して下内方にのび端部は比較的鋭い。つまみは欠損している。口径7.6cm、胎土は緻密である。色調は青灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-44 台付壺 須恵器形式でみればⅡ形式5段階であり、口頸部は基部より外反して上外方にのび、口縁部に続くが、端部は欠損している。肩部は頸基部よりまっすぐ下外方にのびた後、垂直に下がり、内弯気味に下内方にのびて、底部に至る。体部中位に円孔を穿つ。脚部は基部より外反して下外方にのびる。端部は面をなす。推定器高20cm、基部径3.8cm、体部最大径10cm、脚底径6.4cm、脚部高2cm、胎土は緻密である。色調は青灰色を呈している。焼成は硬質である。

第7図-45 台付長頸壺 体部から頸部は欠損している。底部は丸い。脚部は基部より外反して下外方の一部で欠損している。胎土は緻密である。色調は灰白色を呈している。焼成は硬質である。

## 第4章 まとめ

正法寺跡は数次にわたって発掘調査され、白鳳時代の素弁八葉蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、三重の塔を東西にもつ薬師寺式伽藍配置の大寺院であったと推定され、白鳳時代から室町時代に至るまで存在したことが判明している。寺域からは正方寺の墨書のある土師器皿が出土している。

大阪府教育委員会が平成5～7年にかけておこなった府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス建設工事に伴う発掘調査で基壇跡を確認した。その続きを確認するために、四條畷市教育委員会が平成12年に国庫補助事業として、発掘調査をしたところ基壇建物の続きが確認された。基壇建物の規模は大阪府の調査とあわせ東西26mまで確認できた。建物の礎石は浅い溝みをもつ一辺が1.2m前後のものが確認され、柱間は2.5～3.0mであった。それを復元すると南北4間×東西8間と想定される。この建物の時期は平安時代と考えられ、薬師寺式伽藍配置に従うと多少のずれはあるものの講堂の位置にあたると考えられる。また、乱石積みの瓦敷きの中には円筒埴輪が転用されており、かつては生駒山系の裾野に築かれた古墳群であった往時をしのぶことが出来る。

平成15年度の国庫補助事業の発掘調査では、寺域の西端を示す築地の南西の部分にあたると考えられる場所で鶴尾片が出土した。この鶴尾は創建瓦と共に伴していることから伽藍の様相を知る上で貴重な資料を得ることが出来た。なお、鶴尾は四條畷市内および正法寺跡において初めての出土であった。

今回の発掘調査では、第3調査区で寺域の東南方向から北西方向に流れる大溝が検出された。この大溝は寺域の東端にあたる。大溝は、創建当時に掘られたもので、そのなかから創建瓦素弁八葉蓮華文軒丸瓦・馬の歯・椀形滓・鉄滓・朝顔形埴輪・土器類などが多く出土した。完形品が多いことから寺に係る祭祀がこの場所で行われたと考えている。なお寺域の東端が確認されたのは初めてである。

また大溝最下層で出土した馬の歯は、清滝古墳群第二号墳の周溝内に埋葬されていた馬と同じように、この馬もかつては古墳に埋葬されていたのかもしれない。その埋葬施設が正法寺や水田の造成にともない削平されたのか、それとも奈良時代の馬であるなら、四條畷市で始めての奈良時代の馬である。

朝顔形埴輪と須恵器壺は古墳時代中期のものである。これまでの清滝古墳群の発掘調査によって古墳時代中期後半から後期にかけての古墳が見つかっているが、今回出土の埴輪

及び須恵器から見て古墳群の開始時期が遡ることが判明した。

原因者負担の調査区からは、巨石の下の土坑から甕が出土した。これは岩陰祭祀がおこなわれたことを示しているのではないか。

寺院の発掘調査では伽藍配置など主要堂塔解明に重点がおかれるのは当然のことであるが、寺院に付属する造営関係工房や修理所などの金属関係工房が解明されることは、寺の全容を知る上で重要なことである。正法寺でも専門工人を組織し、寺に必要な金属製品の生産や修理にあたったのは自然のことと考えることができる。

大溝最下層から出土した椀形滓や鉄滓は寺域内からは初出である。寺域内で金属関係工房があったことをしめしている。また、寺域に接近する東側を平成8年に発掘調査した際には、ふいご羽口・鉱滓・鉄釘など金属工房関係の遺物が出土した。これらは平安時代に属するものであった。平安時代には寺域外に寺所属の金属関係工房があったと推定される。

また、昭和59年の発掘調査において、寺域の北東角で平瓦三枚が重なって溶着したものが出土したが、これは寺域周辺に瓦窯や瓦工房があったことを示している。

正法寺の寺域から1km南側には集落遺跡の木間池北方遺跡が存在した。この遺跡の河川から奈良時代の土馬数体とともに須恵器円面硯や土器類が出土し、平城京と同じように罪や穢れをはらう祭祀が行われていた。また、文字資料としては同じく木間池北方遺跡で「・・麻呂」や南野遺跡で「大」などの墨書土器が出土している。このように数次にわたる発掘調査と周辺調査によって正法寺をとりまく環境が想定できるようになった。

また正法寺から1km北西に讃良寺跡がある。正法寺と同時期の白鳳時代に属する古代寺院である。正法寺・讃良寺・寝屋川市高宮廃寺は素弁八葉蓮華文軒丸瓦を創建瓦とする同系列の寺院で2km内に三寺が接近して建立されている。四條畷市は摂津、河内、和泉、大和、山城の畿内をつなぐ中心ともなる重要な地域であった。

## 報告書抄録

フリガナ	ショウホウジアトハックツチョウサホウコクショ
書名	正法寺跡発掘調査報告書
シリーズ名	国庫補助金事業
著者名	野島 稔
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-0051 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 072-877-2121
発行日	2005年（平成17年）3月31日

所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
正法寺跡	四條畷市 清瀧	272299	北緯 34° 44' 14" 東経 135° 39' 05"	平成 16年11月10日 ～12月27日	70.5m <sup>2</sup>	道路建設

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正法寺跡	寺院	奈良時代	溝 石敷き遺構	軒丸瓦・平瓦 土師器・須恵器 馬の歯・椀形漆	寺域東端

# 圖版

図版 1 正法寺跡 調査前 全景・機械掘削



図版 2 正法寺跡第一調査区 遺構検出状況



図版 3 正法寺跡 第二調査区 遺構・遺物出土状況



図版4 正法寺跡 第三調査区 調査スナップ・土器出土状況

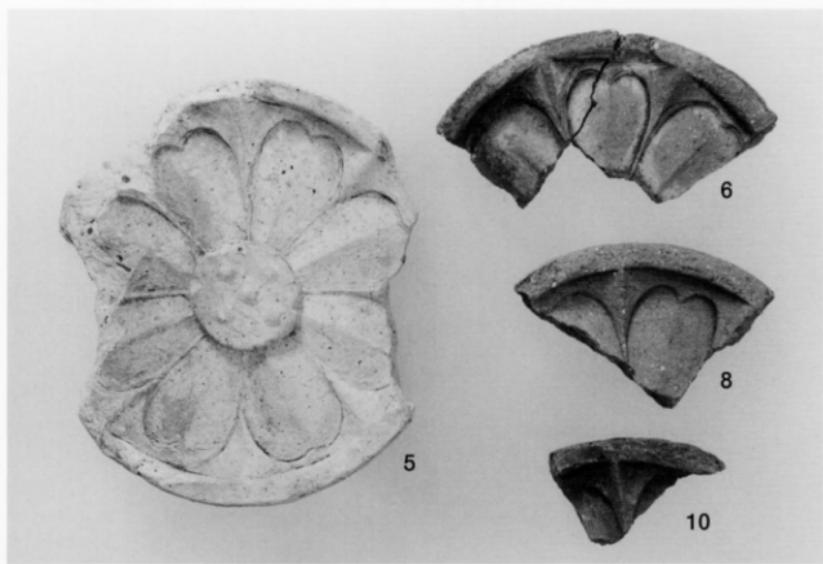


図版 5 正法寺跡第三調査区 遺物出土状況・完掘状況

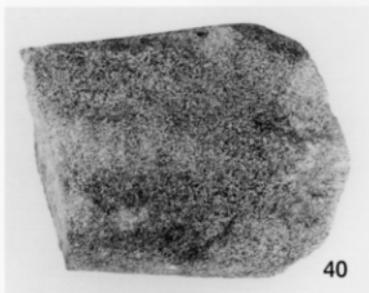
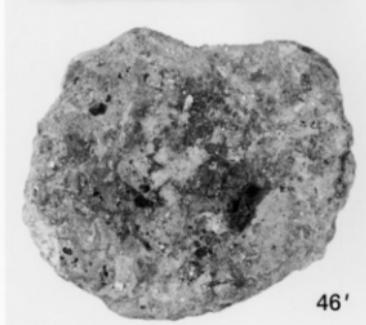


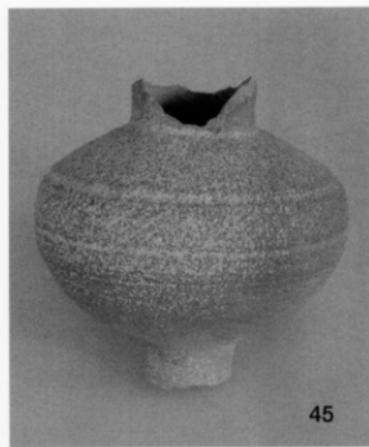
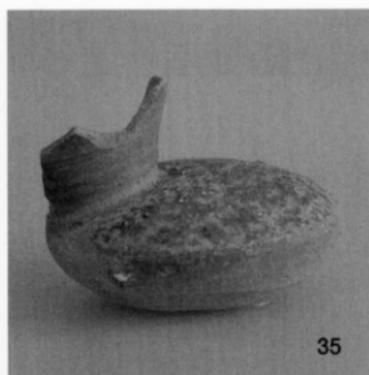
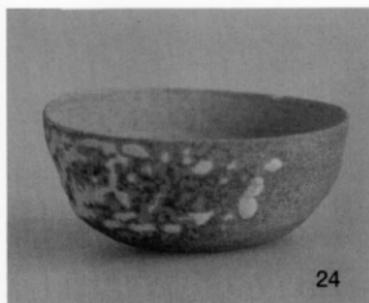


図版 7 正法寺跡 出土遺物









**正法寺跡発掘調査報告書**

平成17年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会  
四條畷市中野本町1-1

印刷 川西軽印刷株式会社